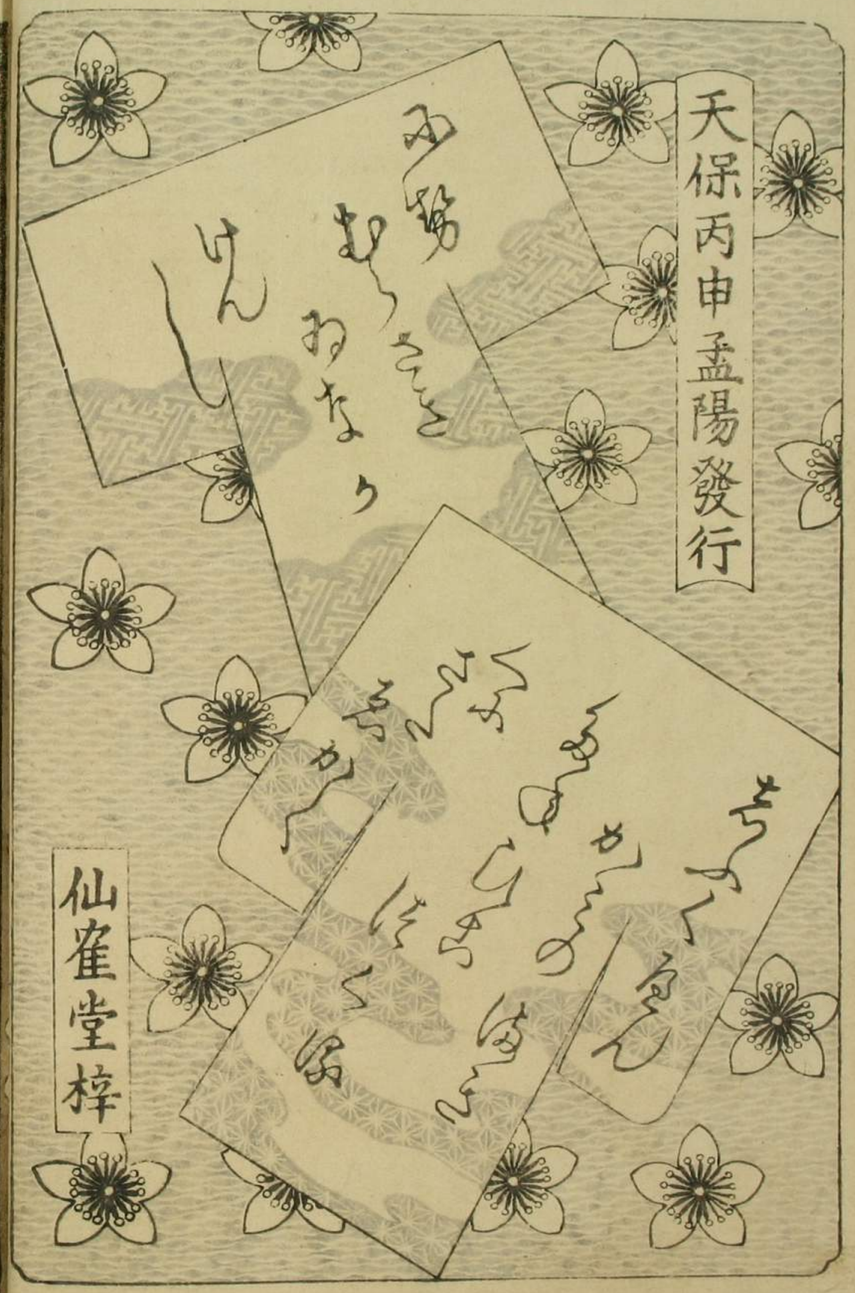
佛説阿含原氏 十九

特別
へ13
4274
19

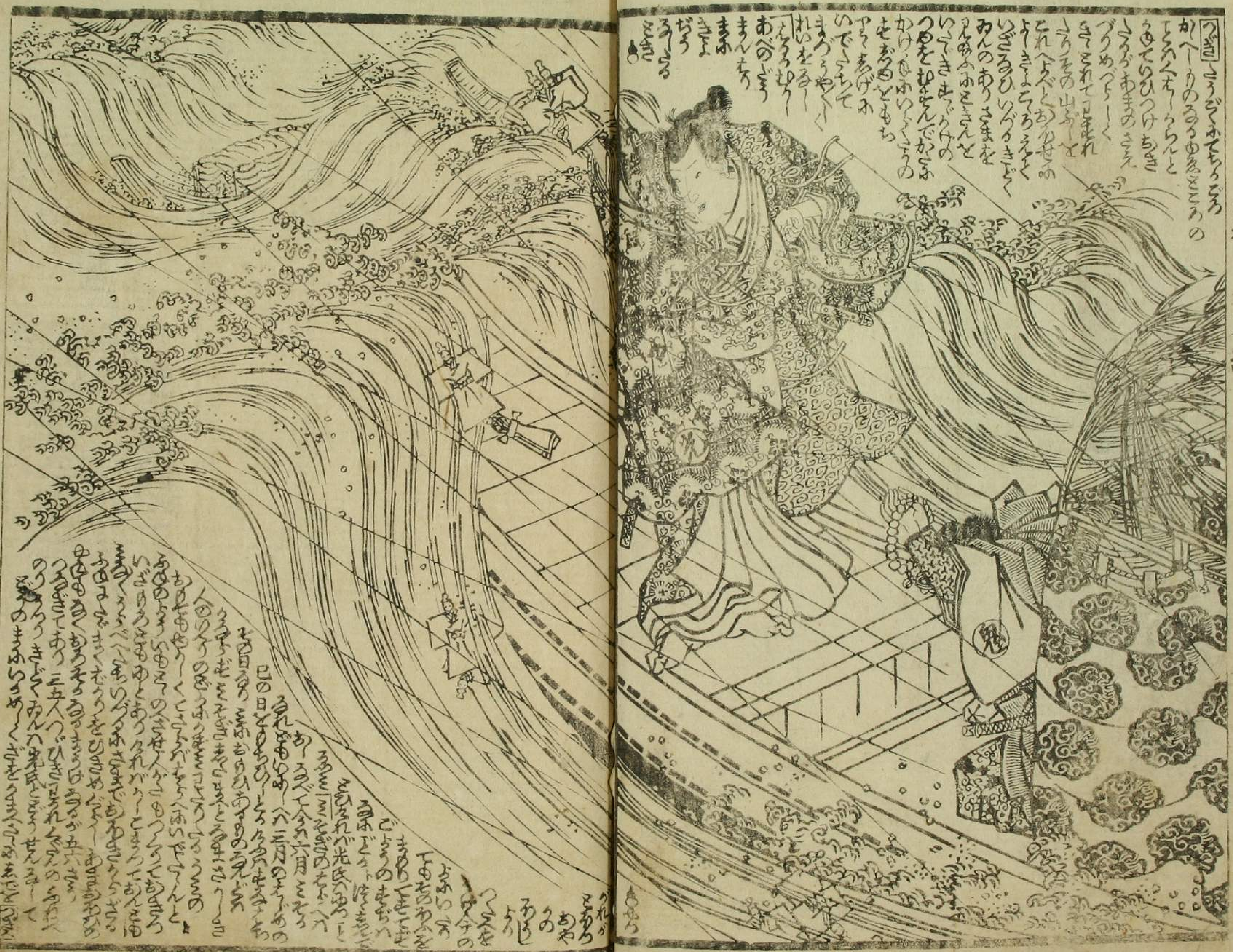
N3
4274
19
91-2350



其稿なりし刻予故ありて源氏の巻の数よ弃く五十余年
住ありし谷式離淺草ゑ居とトも頃て上野より明屋光氏の移る
傳て當てしも頗奇偶とのべき欲て這ゑる程ゑれど上野のひと
そ隔りしも彼越ゑの山ハ最遥ゑと書る迺を目前ハ古郷ゆゑ
思ひそゑら此所ハ樓めく物ありて月光ハよゑ〳〵ゑれば池水ようゑる
影と緑ハ是あゑ〳〵ゑの石山と後十年を綴り終て角ふりよりよ蝸牛の
舎ハ秋のゑのゑを納ゑ移町ゑんでも此ゑがこそゑで年頃の住ひよりハこよゑく
明ゑるむかりハ巻の初ゑ仙通ひゑりまゑ南ハ馬場へゆゑる小路を隔て牛の
林の緑ゑるゑれゑり富士の高根の雪白く両隣山ハ青ゑゑゑり湯島乃宮居も
右ゑまゑく樞寺の佛閣ハ左ゑ迎ゑとのひゑで紅ゑれば樓上の詠めの自讃のゆゑゑれど
傍柴ゑ紫ゑの一本の茂驕ゑ墓ある金龍寺の門の並び森の下道南の方
丁字街へ乙未の秋のすゑ移りゑる所書のかゑりゑ記ス

天保丙申孟春發行

柳亭種彦



つゞき さうでかでちるごろ
かへしかのみづのゆるところの
まろくちらくらんと
うみてらのひつけちぎき
さうがあまのさへ
づりめづらしく
きこえれてりとれ
うちその山ぶしと
これへよべとおゝせに
よしきよてろえぞく
いざるひいづかきぞく
みんのありさまを
うんかふかきさんを
いでき出でがけの
つゑをむさんでかぶな
かけ、むかひくらうの
もおめとももち
やうあげわ
いでうちて
まづうやく
はいをろし
ゑろもう
おべのぶう
まんもち
まあきよ
ぢう
うしろ
とき

これがもあやのあとより

つくえを一ツ分てのよりい方
下右そのわをま
まめしをて
ごようのまぢへ
なほどうち持たせて
そむらればゞ光氏へゆつりしと
ろかにそぎのきかへ六
あつぺて今の二月の六月こそ
それどもいめ[illegible]
巳の日とのおもむき
その日ありてそぎこまで
ろかぞぎそぎこまで
人のくりのおもてさうしの
ありよりやしくとさうがちやうへゐいでらんと
ふなのまういもそての人がさもつくりてもきちろ
いざりかもゆとありされがおーとまりておんさは
まろくろべへ[illegible]のうちさもまでもわきなくらざる
かさみしをまくむかりをひきとめぞくーわきまあやめ
ちよもあくちからまゝは二つが五六さ
つぎきてあり二三五人つゞひきされくさんのむかへ
のりうきぞくおん八光氏とぞうせんそーて
ざくのまふらさせーくざをうまへるあまたと[illegible]

光

二

良
光

天保七年丙申春新彫

傾紫田舍源氏

柳亭種彦作

歌川國貞画

当年十八編より廿二編まで開板おかそうずに相成奉恐入

笠亭仙果作

歌川國芳画

一筋道雪眺望

全四冊

笠亭仙果作

歌川貞秀画

蔦紅葉伊達の錦織

全四冊

種彦校合

井筒屋の娘子八百屋乃娘

紫房紋多箱

全六冊

歌川貞秀画

糸柳花縁結

全四冊

笠亭仙果作

歌川貞秀画

昔噺さくらかるく

三冊

むら雨太郎ぢぐい

二冊

茶番のいろは

二冊

浦島ぢぐい

三冊

書物地本錦繪問屋

仙鶴堂鶴屋喜右衛門

通油町

御ぞんじ袋入小綴ざつし

種彦改書貞秀画

國貞画

種彦作

俳諧
名所
尾
十九編下

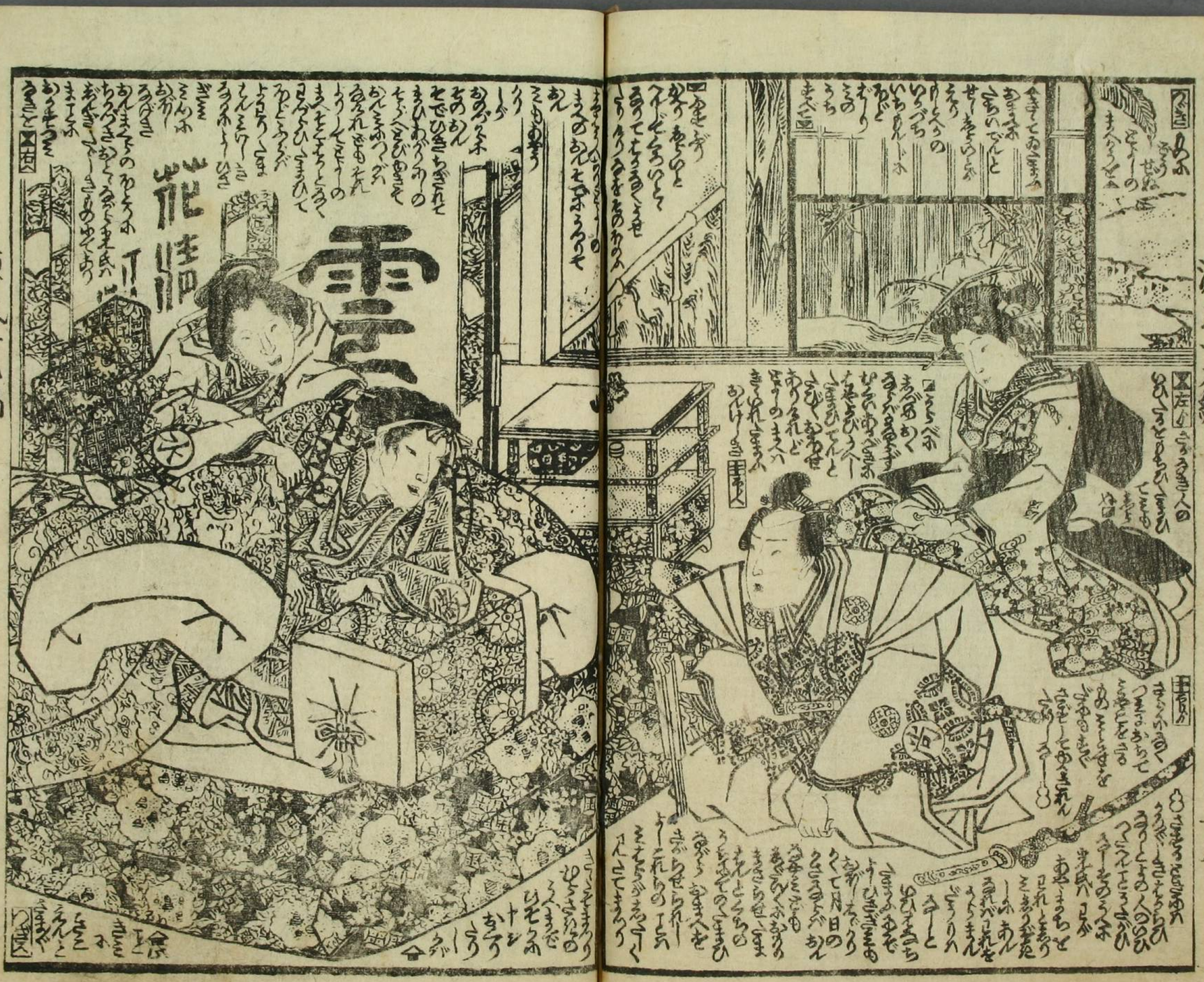
申春新彫

偐紫田舎源氏

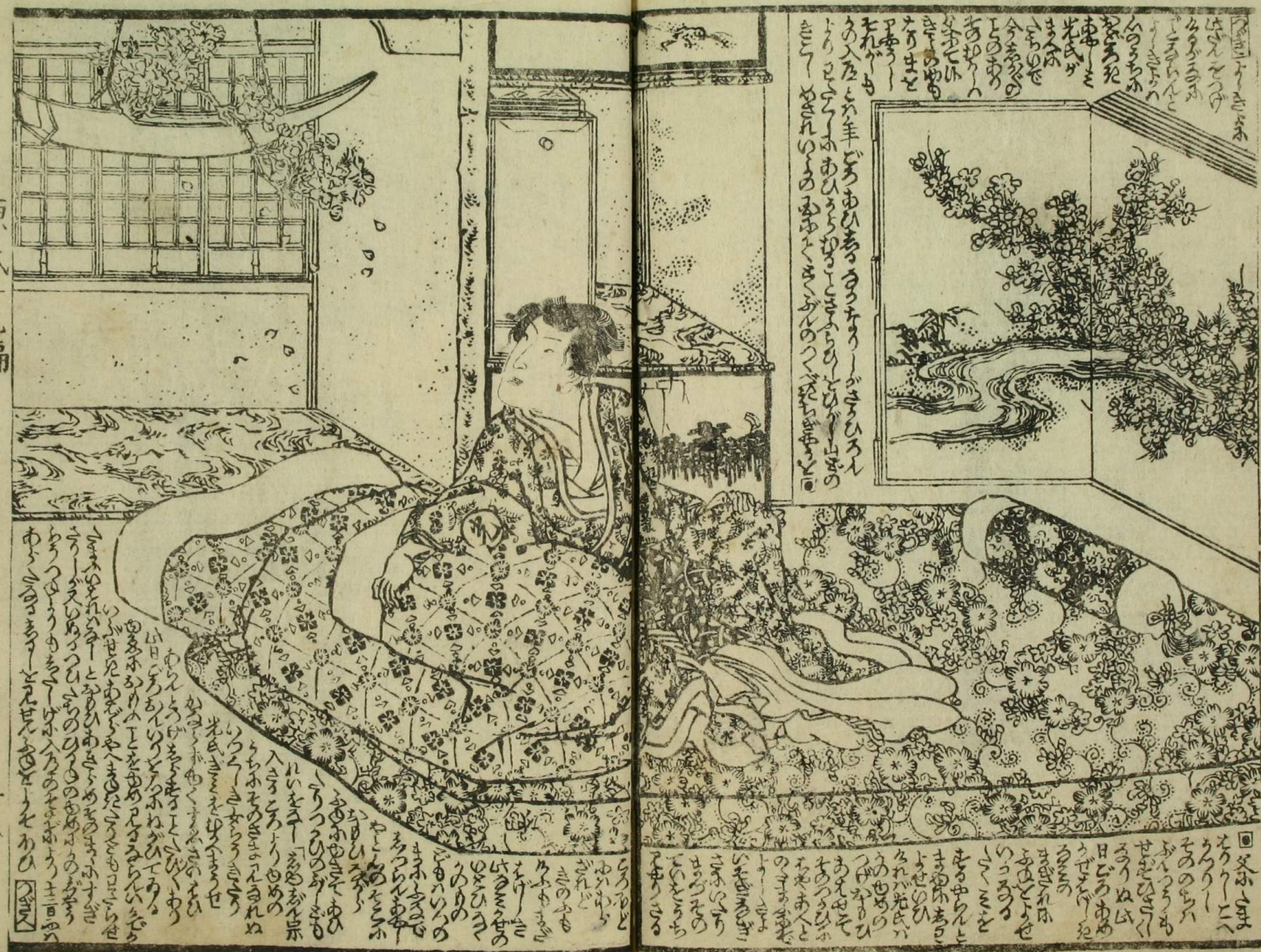
第十九編 下巻

種彦作
國貞画

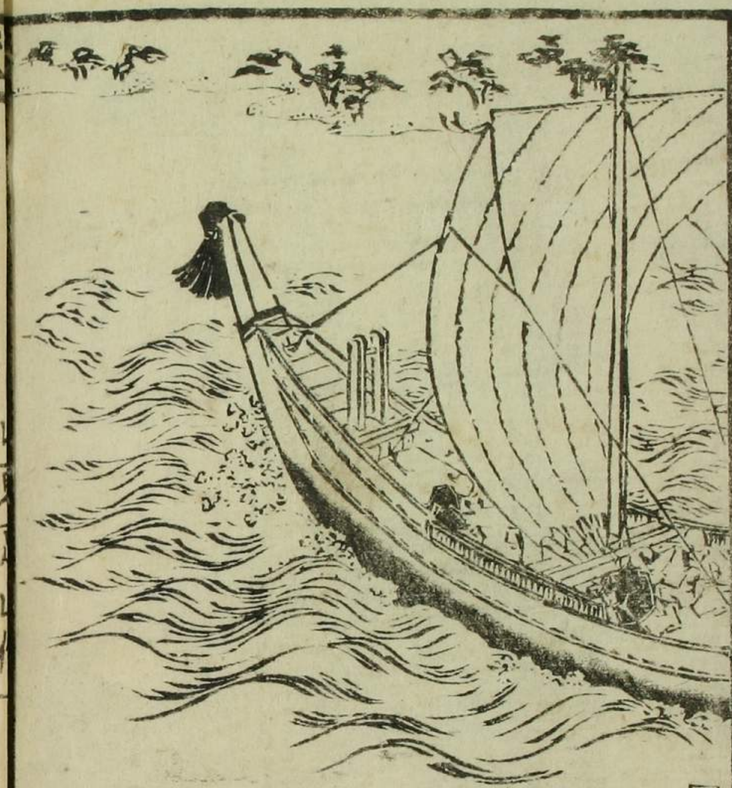
通油町 鶴屋版


雪
花性

桐



歌川國貞画 柳亭種彦作



浄書 千形道友

琴声女房形氣 全四冊
歌川國貞画
五柳亭德升作

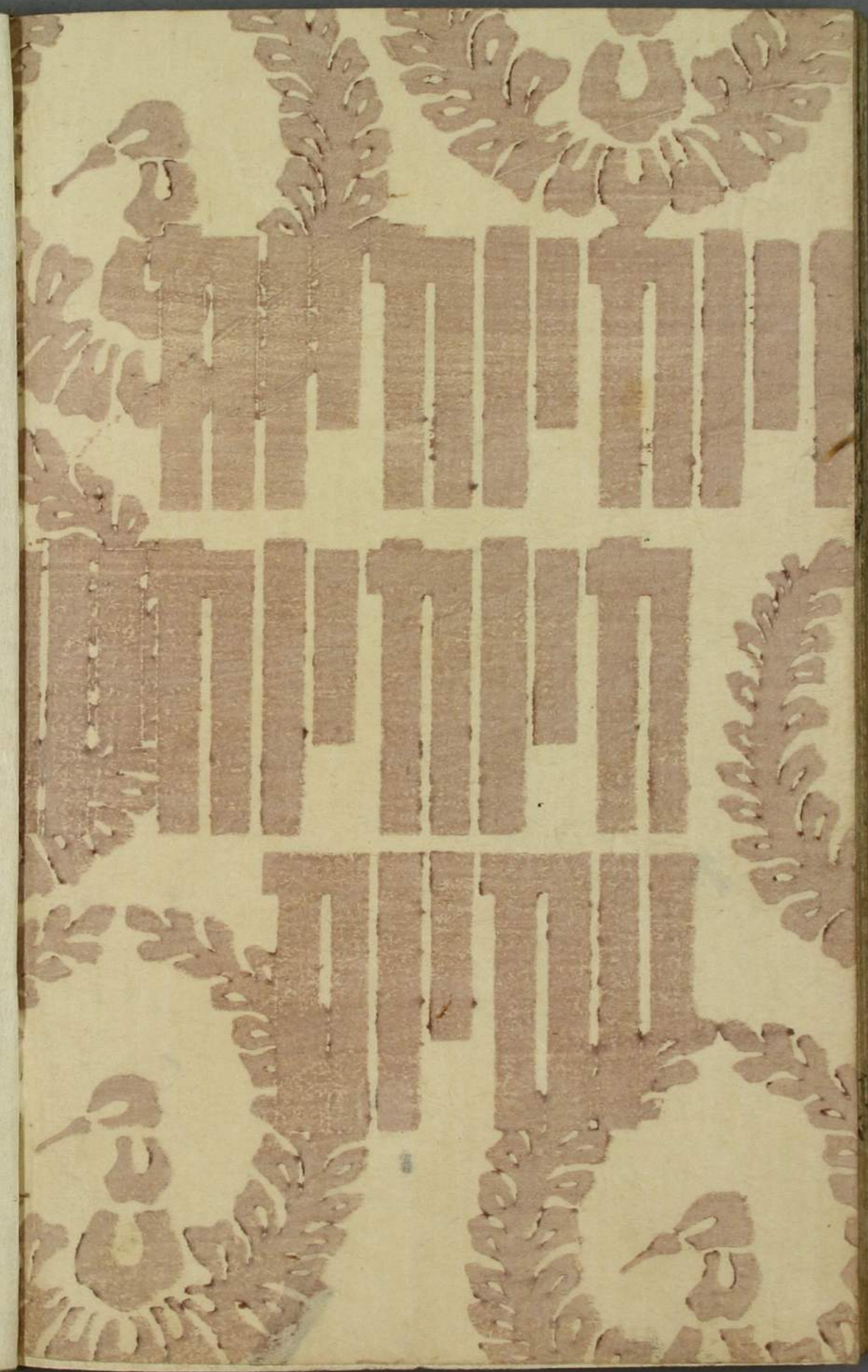
森羅萬象八意氣 全四冊
歌川國芳画
柳亭種彦作

浮波さうし 八冊
歌川貞秀画

烏勘左衛門忠義傳 全四冊
歌川國芳画
宝田千町作

稲葉山嵐の松枝 全四冊
歌川國芳画
笠亭仙果譯

國字水滸傳 十四編 四冊
歌川國芳画

御かほの業ちがひ
美艶仙女香 四八銅 一箱代五匁 三丁目西側 坂本氏製
あらくさ染こまり
黒油美玄香 四八銅 反次 鶴屋喜右衛門

書物錦繪 團扇紙 江戸通油町 鶴屋喜右衛門